



二小だより

No. 7 (8・9月号)

令和8年 8月27日
武蔵野市立第二小学校

平和のバトン

校長 松 原 修

厳しい残暑が続いておりますが、夏休みが終わり、学校には再び子どもたちの明るい笑顔と活気が戻ってまいりました。はじめに、この度の令和8年熊本地震、令和8年8月千葉豪雨により被災された皆様に、心よりお見舞い申し上げます。皆様のご親戚やお知り合いの中にも、被災された方がいらっしゃるかもしれません。一日も早い復興を祈念しております。

さて、少し前のことになりますが、ある有名なアナウンサーの方が、ボランティアとして「被爆体験伝承者」の活動をされているという話をラジオで耳にしました。言葉を扱うプロフェッショナルですから、てっきり体験記などの朗読をされているのかと思いきや、その活動内容は私の想像をはるかに超えるものでした。



伝承者になるためには、まず2年間の研修を受けるそうです。原爆被害の概要や医療、核兵器についての専門的な講習を受けながら、約10人の被爆者の方からお話を伺い、どなたの体験を引き継ぐかを決めます。そして次の1年間は、その方のもとへ通い、凄惨な体験だけでなく、その方の平和への思いや人生観までも引き継いでいくのだそうです。被爆された方々もご高齢となる中、双方の並々ならぬご努力に頭が下がるとともに、「体験を継承する」ということの重みと難しさを痛感しました。

このアナウンサーの方が伝承者を志したきっかけは、先輩から戦争の悲惨さを何度も聞かされてきたからだそうです。先輩から受け取った平和へのバトンを、「もらいっぱなしにしてはいけない。いつか必ず次の世代へ渡さなければ」という強い使命感に突き動かされたとおっしゃっていました。

思い返せば、私が子どもだった頃の先生方の中には、実際に戦争を体験された方がいらっしゃいました。中学校の歴史の授業で、太平洋戦争についてひときわ熱心に、長い時間をかけて語ってくださった先生の姿が今も記憶に残っています。現在は、戦争を知らない世代の教員ばかりとなりましたが、「体験していないから伝えられない」と諦めてしまっていないと感じています。

身近なところに目を向けると、私の母も親元を離れ、工場で働きながら中学校（当時の高等女学校）に通った体験を話してくれていました。これまではどこか聞き流していましたが、今年の夏はしっかりと耳を傾けようと思います。

ご家庭でも、平和について話をする機会をもってみてはいかがでしょうか。私たちが受け取ったバトンを、子どもたちという未来へしっかりと手渡していくために…。

8月24日(月)、武蔵野市教育委員会による救助袋の降下訓練が本校で行われました。救助袋には「垂直式」と「斜降式」の2種類がありますが、本校に設置されているのは斜降式です。当日は専門家の方から取り付け方や使用手順のご指導をいただき、教職員が実際に降下を体験しました。

